

再び『落第忍者乱太郎』の「聖地」尼崎をめぐる

—尼崎市とファンの関係性とは—

西田隆政

(甲南女子大学文学部日本語日本文化学科・教授)

・はじめに

稿者は、西田(2013b)で、尼子惣兵衛作のマンガ『落第忍者乱太郎』の「聖地」とされる尼崎市内の地名探訪の経緯と、そこから得られた知見をまとめた。本稿は、それに引き続いて、未探訪の命名由来の地名を探訪した記録であり、西田(2013b)の続編となるものである。

『落第忍者乱太郎』の人気は、現在も衰えることなく、前回探訪に参加した学生だけでなく、新入生にもぜひとも探訪に参加したいという学生が現れるという状況となった。そこで、2013年7月に2回目の探訪実施という運びになった。本稿では、探訪の概要を述べるとともに、尼崎市とファンとの関係性についても、検討することにしたい。

・1 探訪のスケジュール

当初予定したスケジュールは以下のとおりである¹。

7月25日 阪神尼崎駅 10時集合・解散予定は16時30分・参加学生8名+引率教員1名
10時阪神尼崎駅→10時10分尼崎城跡→10時20分中在家町→10時40分初嶋大神宮(休憩)→
11時初島町→11時30分阪神大物駅→阪神杭瀬駅→12時30分杭瀬本町(昼食)→13時今福町→
13時30分左門橋→14時浦風小学校→阪神杭瀬駅→阪神尼崎駅→15時尼崎市総合文化センター→
阪神尼崎駅→阪神出屋敷駅→16時30分竹谷小学校:ここで解散予定(可能であれば鶴町も)

上記のスケジュールは、真夏の炎天下を想定すると、かなり厳しいものとなる。さらに、前回とは異なり、阪神尼崎駅の貸自転車は事前登録が必要で急の利用は困難であった。自転車が使用できず、徒歩中心で、一部電車利用という方法しかなかった。

しかし、このスケジュールでも、『落第忍者乱太郎』ファンの学生たちは、参加を躊躇することはなかった。前回参加の4年生5名だけでなく、1年生3名も勇んで参加することとなったのである。

・2 探訪記(1) —集合から初島まで—

7月25日は快晴であった。雲一つない好天ではあるものの、炎暑のなかの行程の厳しさが予想された。引率者である稿者は、自前の折り畳み自転車ブロンプトン²を準備して、尼崎駅に向かった。下見偵察や先回りをするとき用である。電車にも、折り畳んでカバーをすることで、持ち込み可能である。

10時前後より、陸続と学生が集まってきた。4年生のAMとON(西田ゼミ)、OH(KNゼミ)、SR(YNゼミ)、KM(MEゼミ)と、昨年度も参加した5名である。さらに、1年生は、日本語日本文化学科のOKとNS、生活環境学科のNIが参加した。

¹ 尼崎市の地図については、西田(2013b)所収、尼崎で観光(2012)編の「尼崎観光みどころMAP」参照。

² 英国ブロンプトン社製の自転車。輸入元水谷自転車のサイト参照。<http://www.mizutanibike.co.jp/brand/brompton/> 2014年1月27日最終確認。

電車の遅れで1名が10時を過ぎたものの、10時15分、全員意気揚々と尼崎駅を出発した。まず、駅の南口を出たところに、土井ホテルがある（写真①：写真ではわかりにくい「土」に井桁を組み合わせたマークがビルの上にある）。主人公トリオのいる1年は組の担任教員は土井半助である。もちろん、地名でもなく命名の由来であるわけもないが、早速テンションの上がる展開であった。

そこから南東に進み、尼崎城跡に到着した（写真②）。石垣と矢倉も再建したものである。『落第忍者乱太郎』とも無関係であるが、忍者ものにお城はつきもの、左手に見つつ、さらに南下し、国道43号線をトンネルで渡って、6年生中在家長次命名由来の地、中在家町には、10時30分に到着した。

中在家町は、国道43号線と旧左門殿川に挟まれた小さな町である。そこには、中在家公園があり、探訪の目的地となった。公園内に、QRコード付きの看板があった（写真③）³。見つけて、全員写真を撮影する。さらに、一人の学生が、「中在家町2丁目なら中在家町二（中在家長次）になる」と叫ぶ。早速プロンプトンで踏査すると、まさにその町名表示板が発見された（写真④）。

親父ギャグのような駄洒落であるが、ここでまたもやテンションは最高潮となった。西田（2013b）で述べたように、実地探査の楽しさは、想定したこと以外の発見にある。そして、それは得てして想定以上の面白さを生むのである。

しかし、時計の針が11時に近づくとともに気温は急激に上昇し、33度にならんとしていた。ここからは、阪神工業地帯の工場群の中を徒歩で進まねばならない。炎暑の上、大型車両が通行する厳しい道りが続く。

まず、築地町にある初嶋大神宮（写真⑤）に立ち寄る。そこから、東部浄化センターに沿って、北初島町と南初島町の境界線の道路上の尼崎市営バスの初島町バス停を目指す。1年生初島孫次郎命名由来の地である。

バス停は、まさに、工場群の真ん中にあった（写真⑥）。全員、往来する大型車両に注意しつつ、撮影し、無事目的を達成した。しかし、気温は上昇し、疲労がたまりつつあった。そこで、東初島町にあるコンビニエンスストアで、アイスクリーム休憩となった。昼食前の丁度良い休憩であり、前回からの恒例である。



写真①



写真②



写真③



写真④



写真⑤



写真⑥

³ 株式会社マピオンによる企画。以下の2件のサイトを参照。

<http://www.news2u.net/releases/87091> 2014年1月27日最終確認。

<http://purin.igaog.com/%E5%B0%BC%E5%B4%8E%E6%95%A3%E7%AD%96%E6%97%A5%E8%A8%98/%E2%97%86%E5%B0%BC%E5%B4%8E%E5%B8%82%E5%86%85%E5%85%AC%E5%9C%92%E3%83%AC%E3%83%9D%E2%97%87%E5%BF%8D%E3%81%9F%E3%81%BE%E3%82%AD%E3%83%A3%E3%83%A9%E7%9C%8B%E6%9D%BF%E2%97%86> 2014年1月27日最終確認。

・3 探訪記（2）－初島から尼崎文化会館まで－

休憩後、北に向かい、阪神大物駅を目指す。日差しも強く、市街地故、風も通らない。学生たちは、暑さのあまりに、「私は風さんと婚約する」「私は日蔭さんと結婚する」「私は両方」等、「わけがわからないよ」。そうこうするうちに、12時に駅に到着する。冷房の効いた阪神電車で全員息を吹きかえした。

浦風小学校を高架橋の車窓から眺めつつ、一駅で、阪神杭瀬駅に到着した。杭瀬は作品中に登場する杭瀬村命名由来の地である。昼食は、駅から北上し、国道2号線を渡り、杭瀬商店街内のファーストフード店でとった。12時過ぎから13時過ぎまで、ひたすら食事と休憩に集中する。ここで、あらためて、午後からの計画を練る。今福町は当初来訪するかどうか、微妙な位置づけであったが、全員ここまで来たら行くべしとなり、決行する。

商店街から北東に進み、13時15分に、1年生今福彦四郎命名由来の地、今福町に到着する。ここは大規模な団地の町で、今福公園があった（写真⑦）。しかし、QRコードの看板はブロンプトンを駆使して探しても見つからない。気を取り直して、南下し、左門殿川にかかる左門橋に向かう。左門殿川は、兵庫県と大阪府の境を流れる、神崎川の支流である。そして、3年生神崎左門は、この二つの川を合わせた命名となっている。前回は、より北の上流にある神崎町は訪ねたものの、この左門殿川と合わせなければ、姓名そろった命名由来の探訪は完成しないことになる。



写真⑦

このとき、国道2号線の温度計は35℃を示していた。あまりの暑さに、全員意識朦朧としつつ、ただ目的地を目指す。左門橋には13時35分に到着した（写真⑧）。国道2号線で使用される普通のコンクリート橋である。しかし、それでよい、普通に地名があり、それこそが『落第忍者乱太郎』の「聖地」探訪なのである。



写真⑧

このあと、国道沿いに、阪神杭瀬駅を目指す。暑さの中、再びコンビニエンスストアにて休憩する。水分補給は重要であり、全員ペットボトル飲料を購入する。前回同様、夏の探訪においては、コンビニエンスストアの存在は不可欠である。尼崎市内のコンビニエンスストアは、『落第忍者乱太郎』とコラボレーションしてもよいのでは、と、朦朧とした頭の中を妄想が巡っていた。

阪神杭瀬駅からは、阪神電車の高架橋の日蔭に頼りつつ、西に向かう。風の通りにくい市街地では、日蔭だけが探訪の友である。参加者の口数も減りつつあり、ただ目的地を目指す。13時50分に、3年生浦風藤内命名由来の地、浦風小学校に到着した。ここで問題が発生した。さすがに、小学校を撮影するのは躊躇される。プライバシーや警備上の問題もある。しかし、尼崎市の「さりげない」配慮か、小学校の通りの向かいに、浦風小学校の位置を示す案内板があった。（写真⑨）全員、これこそ撮影用（確信！）として、写真に収める。



写真⑨

暑さはまだ厳しいものの、全員目的の着実な達成には充足感を得ていたようである。ゆったりとした足取りで、東に向かい、杭瀬駅に到着し、電車一駅で舞い戻った、尼崎駅から、「忍たま乱太郎と尼崎展」開催中の尼崎市総合文化センターへと向かった。

・4 探訪記（3）－尼崎総合文化センターから竹谷公園まで－

阪神尼崎駅から、尼崎市の誇るアルカイックホール⁴も併設される、尼崎市総合文化センターへと向かう。アルカイックホールは、オペラの公演も行われる、すばらしいホールであり。地元の『落第忍者乱太郎』ファン

⁴ 尼崎市総合文化センターのアルカイックホールのサイト参照。 <http://www.archaic.or.jp/center/arc/> 2014年1月27日最終確認。

は、ここでの『ミュージカル忍たま乱太郎』⁵の上演を心待ちにしている。

14時10分に到着して、早速に展覧会を見学する。入場者は、それほど多くないものの、その大部分がファンとおぼしき女子である。作品の本来のファンである、親子連れよりも、目につく存在となっているが、それでも、騒ぐわけでもなく、展示に見入っている。とりわけ、作者尼子惣兵衛氏の忍者道具コレクションはすばらしく、撮影不可であるが、全員目に焼き付けていた。『落第忍者乱太郎』は、子供向けのコミカルな作品ではあるものの、その背景には本格的な歴史や忍者・忍術に対する作者の深い造詣のあることが感じ取られ、この作品の魅力についても、あらためて、考えさせられるものであった。

参加者たちは、展示の素晴らしさに感動するとともに、久方ぶりの冷房の効いた部屋での休憩に、すっかりはまりこんでいる様子であった。ゆっくり見学するうちに15時にもなるとしていった。そろそろ収束を考えるべき時間でもある。とくに、当初元気であった1年生たちが疲れていた。その点、4年生には一日の長があり、淡々と進めていた故か、多少の余裕はありそうであった。

炎天下でもあり、ここ阪神尼崎駅でお茶休憩にして解散するのも、一手である。全員に尋ねると、やはり、暑くてもしんどくても、竹谷小学校には行きたいと口々に言う。そこで、地図を調べると、竹谷小学校の裏手に公園のあるのがわかった。小学校と違い、公園なら名標の撮影も問題がない。これを今日最後の探訪地と決めて、全員阪神電車に乗り込んだのである。



写真⑩

一駅で出屋敷駅に到着した。ここからは、稿者の勝手知った道である。友人が出屋敷駅前に在住し、10年ほど前に尼崎市民で七松町(6年生七松小平太命名由来の地)在住の頃は、自転車でよく通った街である。

15時40分、5年生竹谷八左エ門命名由来の地、北竹谷町の竹谷小学校に到着した。15時を過ぎて、心なしか風と日差しも涼しく感じられるようになってきた。小学校から裏通りに回ると公園があった(写真⑩)。夏休み中らしく、子供たちが蟬取りをしている。何の変哲もない公園であるが、こういうのを回るのが『落第忍者乱太郎』の「聖地」探訪とわかったようなことを妄想していると、学生が騒いでいる。ここに、本日二つ目のQRコード付きの看板があったのである(写真⑪)。



写真⑪

全員疲労の中、妙なテンションになりつつあった。公園の本来の主人公、また『落第忍者乱太郎』の本来のファン層である、小学生たちが引くようなものであった。地元の小学生にとっては、「何をお姉さんたちは騒いでるのやろ」としか見えない光景である。QRコードを読み取り、全員満足の様子であった。

ゆっくり裏道で出屋敷駅に向かう途中、昭和レトロの雰囲気竹谷荘旅館があった。ここは『落第忍者乱太郎』のファンもよく泊まりに来るらしい。旅館を貸し切って忍術学園を意識したイベントをしたこともあるので、ファンには有名な旅館である⁶。

16時10分、阪神出屋敷駅にたどり着いた。ここから、南に数キロ下れば、1年生鶴町伏木蔵の命名由来の地、鶴町がある。そこは、まともや、工場地帯の真ん中、タクシー分乗していくしかなさそうであるが、さすがに全員そこまでの元気はなかった。ここで解散と決定した。

疲労困憊の中、全員無事、目的完遂して、7か所の命名由来の地を回ることができた。自転車もなく、炎天下

⁵ Wikipedia「忍たま乱太郎 (ミュージカル)」の項目参照。2013年度に第5弾の舞台があり、東京での公演はすでに通算100回を超えるが、地元の近畿地区では一度も公演は行われていない。2014年1月24日に、「ミュージカル忍たま乱太郎第5弾 新たなる敵」の千秋楽の追っかけライブ・ビューイングが初めて開催された。大阪市南区の難波と兵庫県西宮市の映画館2か所にて、間接的ではあるものの、近畿地区でのミュージカルの観劇が、初めて可能となった。ただ、適当な規模の映画館がなかった故か、尼崎市で開催されなかったのが非常に残念である。

[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BF%8D%E3%81%9F%E3%81%BE%E4%B9%B1%E5%A4%AA%E9%83%8E_\(%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%82%AB%E3%83%AB\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BF%8D%E3%81%9F%E3%81%BE%E4%B9%B1%E5%A4%AA%E9%83%8E_(%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%82%AB%E3%83%AB)) 2014年1月27日最終確認。

⁶ 尼崎観光ガイド編集委員会編(2013) p.14にこの旅館の紹介記事がある。

での探訪とすると、十二分の成果といえるだろう。ここからは、さらに、各自で回ろうということで、全員三々五々帰途に就いたのである。

・5 尼崎市と『落第忍者乱太郎』

尼崎市は、現在本格的に、『落第忍者乱太郎』を街の活性化に活用すべく、様々な企画を立てている。2013年夏には、尼崎市役所にて、「ようこそ！尼崎！」のカードを配布している。このカードには、『落第忍者乱太郎』の1年は組主人公トリオと、尼崎市営バスの乗り場表示板が印刷されている。そこには、15か所の命名由来の地名が印刷されており、ファンには非常にありがたいグッズである。市営バスを持つ尼崎市だからこそ可能なサービスでもある。

また、その担当部局である、尼崎市役所企画財政局シティプロモーション推進部都市魅力創造発信課には、多数の『落第忍者乱太郎』のグッズが展示されており、ファンにとっては、探訪必須の場所となっている。さらに、2014年になってからも、当部局では、地名の缶バッジを配布して、これもファンには人気の品となり、市役所を訪れる者は絶えないそうである。

それでは、先の『忍たま乱太郎と尼崎展』をはじめとする、尼崎市の企画と取り組みには、どのような特徴があると考えられるであろうか。稿者の見るところ、それは、「手堅くかつさりげなく」というものではなからうか。

『忍たま乱太郎と尼崎展』は、2013年7月20日から8月25日まで、尼崎市総合文化センター美術ホール5F・4Fで開催された。また、併設展として『尼崎 城と藩と城下町』が開催された。この展覧会では、もちろん名称のように、『落第忍者乱太郎』の公式絵やポスター等が展示されている。しかし、展示の中心となるのは、尼子惣兵衛氏の収集した忍者関係の品々である。同行したファンの学生たちは、こちらにより一層の興味を持ったようである。さらに、併設展は、まさに渋い歴史の展示である。しかし、これもまた、忍者の活躍した時代を偲ばせるものであり、作品のファンにとっても、有意義なものといえよう。

また、今回2か所で見つけることのできたQRコードは、注意書きのある看板に「さりげなく」付されている。『落第忍者乱太郎』のファンでなければ、何一つ不思議なところのない、注意書きのあるだけの看板である。“I ♥ NAKAZAIKE”とあっても、一般の人には単なる地元愛にしか見えないことだろう。街を愛するからこそ、普通に公園では「火気厳禁！！ ゴミ捨て禁止！！」である。しかし、『落第忍者乱太郎』のファンにとっては、キャラクターをイメージさせる、非常に意味のある看板なのである。

これらからいえることは、とくに目立つようなファンサービスではない、ということである。そして、なおかつ、ファンにとっては、派手ではないものの興味を引く内容となっている。逆にいえば、派手なものは、ミュージカルや様々なイベント、同人誌のイベント・コスプレ等のファンの皆さんにお任せしている。命名由来の地である尼崎市は、ファンをバックアップするような体制であるといえよう。

そして、こういう姿勢こそが、長続きする尼崎市とファンの関係性を構築する可能性をもつのではなからうか。あくまでも、主役は作品とそれを楽しむファンであり、市は脇から支える役割を担うのである。そして、ファンも、その市の姿勢を支持しているように見受けられる。

以前、西田(2013b)において、『落第忍者乱太郎』の「聖地」探訪は、他の作品の舞台となった情景を訪ねるものとは異なったものであることを指摘した。それは、作品内に描かれた情景を見つけて確認するのではなく、自分で楽しみを見出していく探訪というべきものであった。そして、ここ数年来の尼崎市の取り組みは、「手堅くかつさりげなく」行われている。これは、作者でもファンでもない、しかし、作者である尼子惣兵衛氏とは親密な関係にある⁷という、特別な位置にあることを活用した「聖地」としての在り方を、提起しているのである。

⁷ 尼崎市の担当者からも、市は尼子惣兵衛氏から特別の配慮をいただいている旨、伺っている。

・おわりに

本稿では、昨年夏に実施した『落第忍者乱太郎』の地名実地踏査を記録し、その概要を述べた。また、そこから見えてくる、尼崎市の『落第忍者乱太郎』の命名の地としての取り組みを紹介した。

尼崎市の取り組みは、まだここ数年のものであるが、マンガやアニメーション作品の舞台の地の取り組みとして、注目されるべきモデルといえよう。ファンとの関係性の面から見ても楽しみな取り組みである。ただ、まずは、2014年こそ『ミュージカル忍たま乱太郎』の尼崎市アルカイクホールへの誘致開催、よろしく、お願いいたします！！

【参考文献】

尼崎で観光（あまかん）編、2012、『尼崎観光ガイド2012』あまがさき・街のみどころご案内委員会

尼崎観光ガイド編集委員会編、2013、『あまらぶ尼崎観光交流ガイド2012-2013』あまがさき・観光振興推進事業委員会「あまかん」

尼崎市総合文化センター、2013、『忍たま乱太郎と尼崎展／尼崎 城と藩と城下町』商工印刷株式会社

尼子惣兵衛、2011、『落第忍者乱太郎公式キャラクターブック忍たまの友 天の巻』朝日新聞出版社

西田隆政、2013a、『『落第忍者乱太郎』における尼崎地名による命名—尼崎の「聖地」化の要因について—』、

『甲南女子大学紀要49（文学・文化編）』甲南女子大学

西田隆政、2013b、『『落第忍者乱太郎』の「聖地」尼崎をめぐる』、『女子学研究3』女子学研究会